



## いま、倉橋と出会う4

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問いつつ機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

私はいつもよく、生活・生活・生活へ、という何だか呪文のようなことを言っています。が、この生活・生活・生活へという言葉には、その間に教育ということを寄せつけていないように聞えますが、もちろん目的の方からいえば、どこまでも教育でありますけれども、ただその教育としてもっている目的を、対象にはその生活のままをさせておいて、そこへもちかけていきたい心を呪文にし唱えているに外ならないのです。教育へ生活をもつてくるのはラクなことであります。それには然るべき教育仕組をこしらえておいて、それへ子供を入れればよいでしょうが、しかし、子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていくことは、なかなか容易ではないかもしれない。しかしそれがほんとうではありますまいか。少なくとも幼稚園の真諦は、そこをめざさなくてはならないものと、私は固く信じているのであります。